

成果を上げていこう！そして成果を示していこう！

～次なるステップとしての医療安全全国共同行動～

鮎澤 純子

九州大学大学院医学研究院 医療経営・管理学講座

*次なるステップに進むときがきた

いよいよ「医療安全全国共同行動」がスタートします。5月17日には東京でキックオフ・フォーラムが開催され、参加病院のエントリーが始まり、これから2年にわたり、医療に従事するすべての職種の人々、病院、病院団体、専門職能団体、学会他さまざまな医療団体が、安全な医療を実現するために職種や立場を超え一丸となって医療安全対策の実施と普及に取り組むこととなります。

「いよいよ」としたのには理由があります。医療安全の取り組みは「次なるステップ」が必要な時期にきていると思うからです。そしてこの医療安全全国共同行動は、日本における医療安全の取り組みにおいても、それぞれの現場における医療安全の取り組みにおいても、まさにその「次なるステップ」になりえるものだと思うからです。

*まだ答えることができていないことがある……「ところで、安全になったのですか？」

患者取り違え事故が社会の大きな注目を集めるようになったのは1999年のことです。それから約10年が経とうとしています。「医療安全推進総合対策－医療事故を未然に防止するために－」において取り組みの方向性が示され、医療法のなかに「指針の整備」「委員会の開催」「職員研修の実施」「改善のための方策を講ずること」が定められました。事故やヒヤリハット事例の収集もそれなりに定着しました。専従の医療安全管理者の配置も進んでいます。卒前・卒後教育、オリエンテーション、そして職員研修と、医療安全についての教育・研修に時間が割かれるようにもなりました。10年前のことを思えば、大きく変わりました。そう、一生懸命取り組んできました。ただし、まだ大事なことが残っています。一生懸命取り組んではきましたが、果たして安全になったのでしょうか。

学部の講義で学生から、病院のオリエンテーションで新入職員から、質問が出ます。「ところで、それだけやってきて安全になったのですか？」……残念ながら私たちは未だに明確な回答を持ちえていません。そして、その質問は学生や新入職員からだけではないはずです。医療安全に日々取り組んでいる私たち自身の、事故やヒヤリハット事例の報告を受け原因や再発防止策を検討しながらの、いよいよ避けられなくなってきた自らへの問いかけでもあります。「……ところで安全になっているのだろうか」

そうした質問や問いかけに答えることこそ、求められている「次なるステップ」ではないでしょうか。

*次なるステップとしての医療安全全国共同行動

とはいえ、何から始めればいいのか、どうすればいいのか、わからないというのが正直なところです。そして、わかってはいるけれど、毎日の業務に追われて始めることができずにいる現場も少なくないはずです。

医療安全全国共同行動は、「医療の質・安全の向上を目指す取り組みの普及」、「医療の質・安全の向上を目指す取り組みの成果の可視化」、「医療に対する患者・市民の信頼の向上」を目的としています。

まずは、入院中の予期せぬ死亡を減らしていくことが急務であるとして、実施をすることで高い確率で防止できる可能性がある事故の発生を防止するべく、具体的に①「危険薬の誤投与防止」②「周術期肺塞栓症の防止」③「危険手技の安全な実施」④「医療関連感染症の防止」⑤「医療機器の安全な操作と管理」⑥「急変時の迅速対応」⑦「事例要因分析から改善へ」⑧「患者・市民の医療参加」という8つの行動目標に取り組むこととなります。

参加病院は、上記の行動目標のなかからそれぞれの病院の状況を踏まえ優先的に取り組む行動目標を選択してエントリーし、組織のトップのコミットメントのもとに組織全体でその実現に取り組めます。

重要なポイントは、本事業には参加団体や支援チーム・支援病院によるさまざまなサポートが準備されているということです。8つの行動目標やその取り組み方については、現場ですぐに使えるツールキットや関連情報がホームページを通して提供されていくことになっています。セミナーの実施、電話相談なども始まっていくことになっています。

「何から始めればいいのかわからなかった」のであれば、まず8つの行動目標のなかから選んで始めてみるすることができます。「どうすればいいかわからなかった」のであれば、具体的な方法が示されます。そして何より、取り組もうとする現場にできるだけ負担がかからないよう、いろいろなサポートが得られることとなります。どうでしょう。取り組んでみることができそう……ではないでしょうか。

*参加を通して得られるもの……質・安全の向上に向けたプロセス体験

あらためて確認しておきたいことがあります。忙しい現場が医療安全全国共同行動に参加して得られるものは何でしょう。

もちろん、本事業が目的とする「取り組みの普及」「取り組みの成果の可視化」「患者・市民の信頼の向上」は、それぞれの病院にとっても参加を通して得られるものということになります。なかでも「取り組みの成果の可視化」は、「安全になったのですか?」という問いかけへの回答になっていくはずですが、しかし他にも忘れてはならない重要なものがあります。「質・安全の向上に向けた改善のプロセス体験」です。

繰り返すまでもなく、8つの行動目標のいずれかにおいて成果をあげるというのは重要なことです。しかし、その成果をあげるに至るプロセスこそが、組織の財産になるということも心に留めておきたいことです。「質の改善」ということもよく言われてはいますが、これまた何から始めればいいのか、どうすればいいのか、わからないものです。わかっている、きっかけがなければ始めることができないものです。参加を通してそのプロセスを成功体験として学習し、組織のなかに改善のプロセスとして構築し定着させていくことができれば、8つの行動目標にとどまらず、組織はこれからさまざまな課題を改善していくことができるようになるはずですが、組織にとっては「成果」よりもっと重要なものになるかもしれません。

*「得られる」から「目指す」、そして「利用する」

さて、「質・安全の向上に向けた改善のプロセス体験」を「得られるもの」として意識するならば、「組織のなかに改善のプロセスを構築し定着させる」ことを「目指すもの」としていくこともできることとなります。「得られる」という受身の姿勢から「目指す」という主体的な姿勢への転換です。そして、参加を通して目指すことができること、目指したいことは、実は他にもいろいろあるのではないのでしょうか。

医療安全管理は、感染管理、医薬品安全管理、医療機器安全管理などとの連携を考えていかなければなりません。行動目標への参加を通して連携の実現を図っていくことができるかもしれません。患者参加の医療安全という新しい取り組みも重要です。これも行動目標への参加をその機会にしていくことができるかもしれません。そして、行動目標における指標の設定、測定のプロセス、成果に関する議論を通して、これまでの現場の取り組みの課題であった医師の参加を大きく促すことができるようになるかもしれません。

参加を通して目指すだけでなく、参加を利用していきましょう。利用して、医療安全全国共同行動への参加を自らの組織にとって意義あるものにしていきましょう。

*「そう、だからこそいよいよ始めたのです」

「安全になったのですか?」という質問には、「そう、だからこそいよいよ始めたのです」と答えておきたいと思います。そしていずれ学生や新入職員に日本の医療安全の取り組みの経緯を語るとき、いよいよ始まるこの医療安全全国共同行動を、医療に従事するすべての職種の人々、病院、病院団体、専門職能団体、学会他さまざまな医療団体が、安全な医療を実現するために職種や立場を超え一丸となって医療安全対策の実施と普及に取り組み、日本の医療安全を次のステップに進めた記念すべき取り組みとして、その成果とともに、胸をはって振り返ることができるものにしていきたいと思います。